



藤 崎 宏 子 先生

藤崎宏子先生のご退職に寄せて

藤崎宏子先生は、お茶の水女子大学大学院で修士過程を修了、東京都立大学（現・首都大学東京）の博士課程へ進学され、1998年には筑波大学で博士号（社会学）を取得されました。職業人としての最初の10年は東京都立大学の助手や東京都立医療技術短期大学の講師を勤められました。1991年4月から聖心女子大学で10年間教鞭をとられ、2001年4月にお茶の水女子大学生生活科学部人間生活学科生活社会科学講座に助教授として赴任、2002年には教授に昇任され、本年3月に退職されるまで17年間という長きにわたり、本学の教育・研究に多大な貢献をされました。先生のこれまでのご活躍を数頁の文章でまとめるのは不可能ですが、特筆すべきものを振り返りながら先生への感謝の気持ちを表したいと思います。

藤崎先生が本学にご着任された当時は、国立の女子大学としての存続理由が問われるなど本学は岐路に立たされており、国立大学の統廃合や独立法人化などの改革が争点となっていた時代でした。しかし、その後、女子大学として存続していくことが堅持され、藤崎先生の本学における研究者及び教育者としての輝かしいご業績が積み重ねられてきました。先生のご貢献を学内・学外の活動、研究、教育の面からご紹介いたします。

藤崎先生は講座主任、大学院前期課程専攻長及び生活政策学コース長、大学院後期課程領域代表、学部カリキュラム委員長などを次々と担当され、2014年度には付属幼稚園園長に選出されるなど、大学運営面で多大な貢献をされました。筆者は本年度から生活政策学コース長を務めていますが、前コース長の藤崎先生の引き継ぎ書類のボリュームにまず圧倒され、また、私にとっては効率良くできない仕事でも先生はいとも簡単にこなされていたということを実感する今日このごろです。学内のご貢献の中でも、先生の最終講義でも触れられていたように、幼稚園園長のお仕事は先生にとって印象深いものであったということです。園長としての4年間は、毎日朝9時の登園時のお出迎えに始まり、午前中の時間はほとんど園で過ごしていらっしゃいました。筆者が外国からの研究者と幼稚園を見学させていただいた際に、藤崎先生にもご同行いただきましたが、園児たちが藤崎先生にまわりつくのを見て、羨ましいと思うと同時に、先生は子どもたちからとても愛されている園長先生なのだと実感したのを今でも鮮明に覚えています。

藤崎先生のご貢献は学会・社会活動においても顕著です。日本社会学会、関東社会学会、日本家族社会学会、家族問題研究学会、日本家族関係学部会、福祉社会学会などの全てで要職を務められました。筆者が一番印象に残っているのは先生の日本家族社会学会におけるご活躍です。この学会で先生は理事、事務局長、編集委員長、学会賞選考委員長などを歴任し、更に、2012年の本学で開催された第22回大会では大会実行委員長も務められました。この学会において何かわからないことがあれば、まずは藤崎先生にお伺いするのが隠れたルールであるかのように、先生は今でも学会の生き字引的存在です。また、先生は社会活動にも力を注ぎ、内閣府「高齢者の生活と意識国際比較調査」企画委員、日本学術会議連携会員、文部科学省人文学及び社会科学の進行に関する委員会委員、全国国立大学附属幼稚園学校連盟幼稚園部会長、日本教育大学協会評議員等としてご活躍されました。

藤崎先生の研究面でのご業績の詳細は本稿の業績目録から明らかですが、先生のご専門は家族社会学、福祉社会学、老年学であり、近刊の『現代日本の家族社会学を問う—多様性の中の対話』（ミネルヴァ書房）を含む単著・編著書6冊、雑誌論文・編著書内論文は62本、調査報告書は22冊など

膨大な研究業績を残されています。特に、高齢者と家族、「ミドル期」「高齢期」における介護やケア政策分野の研究では日本における第一人者です。また、先生の親子のライフコース論は頻繁に引用されています。藤崎先生の単著『高齢者・家族・社会的ネットワーク』では高齢期の友人関係を含むネットワークの多様性が描き出され、家族介護から福祉政策の現状と展望について論じていますが、高齢期のネットワークと介護の研究者にとってはある意味「バイブル的」な著書と言えるでしょう。また、前述した近刊では、隣接する学問領域に注目しながら、過去四半世紀に及ぶ家族社会学研究理論や研究方法論の展開が詳述され、家族社会学と隣接領域の研究者や家族支援を行う政府、企業には必読の書であることは間違いありません。

藤崎先生のご業績を語るうえで、先生の学部生・院生への懇切丁寧なご指導を含む教育面での素晴らしいご貢献について述べなければなりません。先生は本学に着任されてからご退職までに124人の第一ゼミ・第二ゼミ生の卒論指導をなさり、更に、24人の大学院前期課程院生の修士論文の主査を務め、16人の大学院後期課程院生の博士論文の主査及び同課程の36人の博士論文の副査・審査委員をお務めになりました。博士論文審査は長期間に及び、院生にとって、そして指導教員にとっても大変厳しい道のりですが、先生は最終講義で博論指導はお茶大における17年間のうちもっとも印象的でありかつ楽しかったと仰っていました。先生の素晴らしいご指導のもとから羽ばたいていった学部生の多くは社会人として、そして院生の多くは立派な研究者として活躍しています。先生の最終講義後のパーティでは先生からご指導いただいた本学と聖心女子大学の多くの卒業・修了生が集いました。このように優秀な学生・院生に恵まれたのも、先生の研究者としてのご業績と教育哲学に魅了された方々が多かったからだと思います。

個人的な話で恐縮ですが、藤崎先生は筆者にとって偉大な先輩であり、いつでも相談できる同僚であり、そしてなんととってもかけがえのない友人です。先生のこれまでのご活躍を讃えて、ご退職をお祝いすると同時に大きな「藤崎ロス」を感じているのは、私だけではないと思います。藤崎先生は17年間にわたり、学内では要職を歴任され本学の発展に大いに寄与されました。学外でも様々なご活躍をなさり、家族社会学・福祉社会学・老年学などの領域で多大な研究業績を残され、多くの優秀な学生と院生を指導されました。藤崎先生に心より感謝を申し上げるとともに、先生のご健康とこれからのご活躍をお祈りしております。

2018年8月

生活社会科学研究会長
石井クンツ昌子